

◆藤森荘吉 選 ～コロナ禍と俳句～

新型コロナウイルスは、二〇一九年に人間に感染症をもたらした。今年、二〇二一年、令和三年は、ウイルス暦では「コロナ三年」。お正月に詠んだ一句が、「ウイルスと居ても万福和楽かな」。能天気な訳やないけど、そう思わな、やっつけていかれへん。おお、でも、季語がないやないか。で、「ウイルスに季語は要らない去年今年」と詠み直し、コロナ禍と俳句について、徒然なるままに考察してみた。

【三密】

新型コロナウイルス感染防止対策として、「非密三原則」、三密を避けろとしかりに言われている。それは、密閉空間、密集場所、密接場面を避けろの「三密」である。そもそも人間は三カ条が好きで、例えば、非核三原則は、「(核兵器を) もたない、つぐらな、もちこまない」である。

本来、「三密」は、昔からある佛教用語である。広辞苑を開くと、その意味は一密教で、仏の身・口(く)・意の働きをいう。人間の思議の及ばないところを密という。また、人間の身・口・意の三業(さんごう)も仏のはたらきに通ずるところから三密という一とある。ウイルスの侵入を防ぎたいのは、目鼻口の三つの穴だが、仏教用語と同じなのは口だけ。ウイルス対策の三密と仏教用語のそれとは相通ずるところはなさそうで、語呂合せであろう。

【コロナって】

自家用車(古いね)の往年の人気車種に、トヨタの「コロナ」がある。新型コロナもあつたし、コロナ・マークIIもあつた。そもそもコロナの原義は「冠」で、日蝕の太陽の円環状の光をも指す言葉。したがって、現下のウイルス感染症騒ぎのことを俳句に詠むのであれば、少なくとも「コロナ禍」とまで言わなければ、正しくは伝わらないかも。このウイルスは電子顕微鏡で見ると表面に王冠状の突起があるので、コロナウイルスと呼ばれることになつたらしい。

【マスク】

もともと冬の季語だが、いまやコロナウイルスのせいで一年中使用される。季語・季題は、季節の運行、時間の経過を短詩の中に凝縮してくれる象徴的なキーワードだと思っているが、季節の特定が難しくなり、使用上の意味合いも変化しよう。「冬帽とマスクのあはひ怪しき目」などと、別の季語を補わねばならなくなった。

【俳句詠み・俳句愛好家としてのコロナ禍対応】

俳句は花鳥風月を、季節の移ろいの中で愛でて詠む。そして、ヒトそれ自身も自然界の一員として平等に詠む対象にある。人もまた天地の理（ことわり）には抗えず、四時（四季）に随順し、万物との調和の中でしか存在し得ないと基本認識に立つ。花鳥諷詠の態度としては、自然界の現実、あるがままを受容し、災禍があろうと、しのごの言わず、環境の変化に順応せねばならぬという事なのだろう。

【牛の歩みの今年】

今年が丑年なので、「ゆるゆると牛歩も良かれ四方の春」と詠んだ。この姿勢で一年を乗り切ろうと思ったがはたと気がついたことがあった。そこで直ぐ、「老化は待つてくれないけれど」と自分で自分の句に付け句をした。老化のスピードは緩めようとしても弛まない。ウイルスの攪乱も生老病死も、すべて時の流れに従った変容であり、変異株も発生している。そう易々と、私の思い通りにはならない。そうは問屋が卸してくれないのである。

【ウイルスに悪気はない】

新型コロナウイルスに限らず、ウイルスだって生々流転の中で、存続と再生を期している。だから、

「蜘蛛に^あ生れ網をかけねばならぬかな 高濱虚子」

と同じようなもので、悪気があって感染力を誇示している訳ではあるまい。ウイルスは恐れて避ける対象ではあるが、恨む相手ではないだろう。

【待たないで待つ】

さて、生々流転のウイルスも、人智のなせる封じ込めやワクチン開発によって、やがて勢力拡大を妨げられてしまうであろう。たやすい事ではないが、人はそれを待っている。「時ものを解決するや春を待つ 高濱虚子」の通りだ。何時か何時かと心待ちにしようがしまいが必ずやその時は来る。

【俳句ワクチン】

ものは言いよう考えようで、ウイルスに対峙する心の使い方が整えば、俳句を詠みながら、詠もうとしながら、免疫力を些かなりとも高められるのではなかろうか。

ウイルスを上手く丸め込みながら俳句を詠むことは、「俳句ワクチン」になりうる。ワクチンで楽チンになれば儲けものだ。このワクチン、自分一人でも勝手に出来る。お金もかからない。特に「滑稽俳句ワクチン」はかなりの効能が期待できそうである。